

東京五輪会場でも披露 地域の遺伝資源に着目

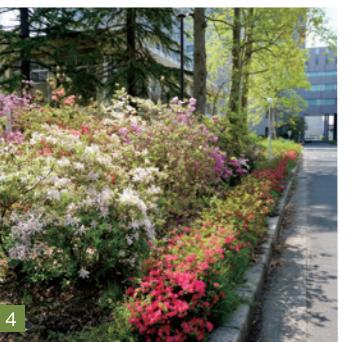


固有種トウテイランを 早咲きに品種改良

ツヅジ研究の第一人者として国内外での数々のプロジェクトに参画してきた小林教授。アルゼンチンでは未利用の花の遺伝資源を発掘、新品種を作つて同国の花き産業を盛り立てる役も担つてきました。そんな小林教授が島根大学に赴任後、隠岐を訪れた際に偶然目にしたのが、日本固有種の植物、トウテイランでした。「青紫色の花穂が美しく、形もきれいで思わず見ました。隠岐では随所で見かけましたが、私には初めて見る花。調べると、京都府と鳥取県の日本海側に局所分布する稀少植物で、環境省絶滅危惧Ⅱ類に指定され

ていました」。

隠岐諸島の分布状況を調査したところ、多くが海岸沿いの露岩上に自生し、暑さや乾燥、さらに潮風にも耐性があることが判明。花色は青紫だけでなく、赤紫や白の変異も発見され、色や開花時期、草姿に多様性があり、バラエティ豊かに品種改良できる可能性があることから、研究をスタートしました。2016年からは東京五輪2020の花壇植栽おもてなし事業に参画。早咲きに品種改良した「F1系ジャパンブルー」は翌年、夏場の過酷な生育環境に適合する品種と賞しました。「植栽展示植物は、種苗業者らが展出した外国原産の夏花壇用の花がメイン。植物にも人間にも過酷な環境で、1カ月以上元気に咲き続ける日本原産のトウテイランは貴重な存在でした」と小林教授。昨夏の大会実施時にも、涼しげな花穂とシルバーリーフが選手や大会関係者、報道陣らと小林教授。昨夏の大会実施時にも、涼しげな花穂とシルバーリーフが選手や大会関係者、報道陣らと小林教授。昨夏の大会実施時にも、涼しげな花穂とシルバーリーフが選手や大会関係者、報道陣ら



1. 東京五輪2020のマスクガーデン(江東区有明)に植栽利用されているトウテイラン(写真提供: 東京港埠頭株式会社)。
2. 個体により花の色が異なるトウテイランの花穂。
3. ガイニマイナとマゲニマイナ。素材本来の味が楽しめる天ぷらやおひたしがおすすめ。
4. 松江キャンパス内には様々な品種のツツジがあり、4月下旬に見頃を迎えた。



津田カブを育種利用し ナバナ新品種を育成

花だけでなく、小林教授は地域の伝統的な野菜の品種改良にも挑戦しています。山陰各地に自生するハマダイコンの品種改良は、ヤマタノオロチを彷彿させるひげ根の多い辛味大根「出雲おろち大根」として実を結び、2008年から販売を開始。また、漬物で人気の松江地域の伝統野菜「津田カブ」と花茎利用型アブラナとの交配で、うまみの強いナバナ2品種の育成にも成功しました。出雲弁で「とてもおいしい」の意味を指す「マゲニマイナ」「ガイニマイナ」と名付けられた新食材は、茎の軟らかさと甘みが特徴。2018年度冬季から試験栽培と販売をスタート、新たな島大発の地域特産ブランドとして普及を開始しています。

現在は、小林教授らの研究グループが2024年に松江市内で主催する花木の国際シンポジウムを目指して、専門のツヅジ研究にも一層力を入れています。「100日以上花が散らないツヅジが数系統出てきており、普及活用する研究を進めたいです」。品種改良の魅力は、「クリエイティブなところ」と強調する小林教授。「人の暮らしに役立つ、より良いものを生み出していく」と、やりがいを感じています。



PROFILE
生物資源科学部 農林生産学科
小林 伸雄 教授
こばやし のぶお

新潟出身の私にとって、冬季は農地が雪に埋もれているのが日常の風景でした。島根に赴任し、雪がないのに開放している畑を見て、低温期でも栽培可能な野菜の品種改良に挑戦。伝統野菜の津田カブの血をひく、子供から大人がうまいと感じる新品種を育成。

人間の生活に役立つ多様な生物を資源として位置付けたものを「遺伝資源」と言います。ほとんどの動植物や微生物が対象となり、医薬品開発やバイオテクノロジーの発展に必要不可欠なものです。農林生産学科の小林伸雄教授は、地域特有の遺伝資源の評価や育種活用に力を入れています。